

信濃川治水紀功碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

そもそも越後平野は、約一万八千年前の海面上昇によって出来た入り江に、信濃川や阿賀野川などの流下土砂が溜まってできたため、水はけが悪く、人々は洪水に悩まされ続けてきた。抜本的な解決を図るためには、川に放水路を造って、洪水を海へと流さねばならなかった。

大河津分水路の計画は、享保期（一七一六〜一七三五）の本間屋敷右衛門による嘆願が、確認できる最古の例となっている。大河津村（現在の燕市五千石）は、信濃川が日本海へ約一〇キロまで近づく所であり、海側に幅約二キロの弥彦山から連なる低い山並みが横たわるものの、放水路を造るには適当な場所と見込まれた。

しかし、この計画は江戸幕府には認められなかった。本間屋の請願と同じころの享保十五年、干拓を目的に阿賀野川に造られた松ヶ崎掘割は、洗堰が決壊して洪水が怒涛のごとく流れこみ、ついには阿賀野川の本流となってしまった。江戸時代の技術では、洪水を制御して掘割への流入量をコントロールすることなど不可能だったのだ。それ以降、干上がった本来的阿賀野川の流域では干拓が進んだものの、阿賀野川と信濃川の河口に位置する新潟湊では、川の水量が減ったため、土砂の堆積に悩まされるように

なった。大河津分水でも同じ轍をふむことが予想されたのだ。

ところが、明治維新を迎えると、技術の進歩を指し去りにして大河津分水の建設が決定した。これは江戸幕府から新政府に頭がすげ替わったせいだろうが、ともあれ明治三（一八七〇）年に工事は着工したものの、お雇い外国人などの意見から技術的に続行が疑問視され、完成間近の明治八年に中止となった。

しかし、洪水を防ぐためには、やはり大河津分水が必要だった。明治二十九年の「横田切れ」は、千二百箇所以上が破堤する大水害となり、さらに翌年、翌々年と洪水がつづき、大河津分水の建設再開を大きく促すこととなった。こうして第二次工事が明治四十二年に着工され、大正十一（一九二二）年に通水、十三年に晴れの竣工式を迎えた。明治初年の第一次工事以前とは異なり、すでに淀川水系において近代的な堰の建設が成功しており、また本格的な機械化施工の実現が、工事を完成へと導いたのだ。横田破堤記念碑の独特の字体は、その場ではとても解読することができず、碑文を写真におさめて分水点へと向かうことにした。そこには大河津分水資料館があり、関連の碑が多く建てられている。ベンチで休んでいた同行者は、くたびれて機嫌が

悪くなっていたので、怒りが爆発しないように注意しながら腰をあげさせた。そうして、ようよう大河津分水資料館に到着すると、入口前には高さ七・二メートル、幅二・五メートル、厚さ四二センチという『二〇〇一年宇宙の旅』のモノリスを思わせる巨大な石板が建てられていた。この信濃川治水紀功碑には、先に見た大河津分水建設の経緯と、完成した分水路の工事概要などが刻まれている。（つづく）



信濃川治水紀功碑

[交通]大河津分水資料館入口前

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。